

難治性の白血病で、米国での治療を目前に昨年一月に二歳で亡くなった柳田優芽ちゃん（名古屋市中南区）の一周忌を迎えた。両親は、一カ月足らずで集まった募金一億一千四百万円のすべてを闘病中の子どもたちに寄付した。「多くの方々に支えられた。名前に込めた通り、優芽から優しさを教わった」と一年を振り返る。（丸田稔之）

優芽への善意 病と闘う子へ



柳田優芽ちゃんの遺影を掲げる父隆さん（右）と、同じ病室だった男の子の両親からのプレゼントを手にする母陽子さん（名古屋市中南区）

優芽ちゃんが眠るピンク色の骨箱は自宅に置かれたままだ。「まだ、手放すことができない」と父・隆さん（四二）。毎朝、大好きだったヨーグルトのふたを開け、供えている。生後一カ月で急性リンパ性白血病の発症が判明し、名古屋大病院に入院。免疫力がなく、無菌の病室で生活する日々が続いた。体調が良い日にマスクを着けると喜んだ。母子・陽子さん（四〇）は「院内の遊び部屋に行けると分かり、うれしかったようだ」と懐かしむ。

四〇度近い高熱を繰り返して、米国で先端治療を受けるしかなくなった。それには一億三千万円が必要で、募金活動を開始した。「私の子も白血病だった」。街頭で涙を流しながら寄付してくれた女性がいた。病気で亡くなった子がためていた形の貯金箱を届けてくれた親もいた。病状が急速に悪化して起き上がれなくなり、渡米を断念。昨年一月十五日、息を引き取った。直前のクリスマスと正月だけは元氣を取り戻し、アニメキャラクターのDVDを見ながらベッドで踊っていた。「もう、逝くね」と心に決め、最後に家族で楽しんでくれたのかな」と隆さん。陽子さんは「私たちを選んで生まれてくれて、ありがとう。二年三カ月、あんな幸せな時間はなかったよ」と語り掛ける。

死後、隆さんは移植やがんの治療を待つ子どもの支援団体を探した。「もう子どもが亡くなるのは嫌。助かる命を早く救いたい」。手元に残った全額を六つの団体などに寄

白血病で他界 一周忌 両親「助かる命のため」

〈優芽ちゃんと両親の歩み〉

- | | |
|------------|---|
| 2012年9月26日 | 優芽ちゃんが生まれる |
| 11月 | 1カ月健診で異常発見。名古屋大病院に入院し、急性リンパ性白血病と診断 |
| 13年6月 | 抗がん剤が効かなくなり、隆さんの骨髄を移植。その後、臍帯血（さいたいけつ）も移植 |
| 14年1月末 | 退院直前に白血病を再発。抗がん剤治療を再開 |
| 10月7日 | 米国の病院での治療に向け募金活動を開始 |
| 10月23日 | 病状が悪化し、募金活動を中断 |
| 15年1月15日 | 永眠 |
| 3～5月 | 募金1億1400万円を「日本移植支援協会」や「がんの子どもを守る会」、移植などの治療を待つ子どもを「救う会」に寄付 |

付した。手術が成功し、回復に向かっている子もいる。入院中、優芽ちゃんは同じ病室の一つ年上の男の子と仲良くなった。お菓子を分け合い、部屋から出られなくても笑顔でいられた。体調が良かった春先、病院に近い鶴舞公園で一緒に桜の下を歩いた。久々の陽光がまぶしそうだつた。

白血球異常増殖 日本では治せず

優芽ちゃんが発症した急性リンパ性白血病は、白血球の数が増え、正常値の百倍以上に増殖する病気。日本で行った治療では治らず、米国で新たに開発された治療法を受けることになった。この治療法は、患者からリンパ球を取り出し、白血球細胞を効果的に死なせるように遺伝子を操作した後、本人の体内に戻す。米国でも臨床試験の段階で、参加

写真とともに自宅に飾られ